



財団  
法人

## ロータリー米山記念奨学会

〒105-0011 東京都港区芝公園 2-6-3 abc 会館ビル 8 階

TEL (03)3434-8681

FAX (03)3578-8281

2000年9月29日

明石北ロータリー・クラブ

下村 恵 造 様

(財) ロータリー米山記念奨学会

事務局長 宮崎 幸雄

拝啓

爽秋の候、時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。

過日はお忙しいところ「ロータリーの友」2000年10月号のカウンセラーインタビューにご協力いただき、誠にありがとうございました。

10月号ができましたので、一部お送りいたします。

今回の「よねやまだより」では、カウンセラーを特集のテーマとして、インタビューの他に、アンケート調査から出てきた課題について報告いたしました。アンケートから浮かんできた課題の一つに、カウンセラーが受けている相談内容と、留学生が実際に抱えている問題とのギャップを挙げましたが、その課題の回答ともいえる考えを、偶然にも下村さんと小林さんが語ってくださいました。その結果、特集を通してカウンセラーの課題と必要な姿勢がご理解いただける内容になったのではないかと考えております。

「燃えている人をいかに探すか」— 下村さんからいただいた貴重なご意見を、今後の活動に反映させて参りたいと考えております。

今後もしもご指導ご鞭撻の程をお願い申し上げます。

敬具

担当：三宅

米山奨学生カウンセラー・インタビュー

発見—出合いが人をつくる

取材・文 元米山奨学生 ソナム・ツェリン・シェルパ (ネパール)

今回は東西のユニークなカウンセラーおふたりに、カウンセラー活動や理想のカウンセラー像を語っていただきました。西はEメールを利用して奨学生との対話を楽しむカウンセラー下村恵造さん（明石北R.C）、東は第2580地区で初の女性カウンセラー小林久子さん（東京四谷R.C）です。



明石大橋を背景に  
下村さん（左）と筆者

下村恵造さん  
(明石北R.C)

お金をためておいしい物を食べて死ぬだけの人生なんて、むなしいじゃない!

明石駅の改札口に着くと「シェルパ君ですか」と元気で明るい下村さんが迎えに来てくださったので、楽しくなってきました。例会場まで歩きながら、下村さんはアメリカ留学中の体験を話してくれました。部屋を探しているとき偶然紹介されたノースウエスト航空のパイロットに、「住むところがなければ、私の家で生活してもいいです。その代わりに私の家族になってください」と言われたそうです。「何も知らない外国人の私にそこまでしてくれたことに心から感動して、自分も難しい立場にいる人々のために役立つ何かをしたいという気持ちをもちました。人間として人間のために何もできず、ただお金をためておいしいものを食べて死ぬだけの人生なんて、むなしいじゃない!」

このあと例会場でメキシコとベルギーの交換学生が下村さんをお父さんと呼んでいるのを見て、本当に彼はだれとでも家族の一員として付き合っていることを実感すると同時に、若い時の素晴らしい出会いによって人はこんなに変わるのかと感動しました。

カウンセラー制度はロータリアンにとって逆効果になる可能性も

—カウンセラーの役割とは?

「カウンセラーの役割の中では、精神衛生面でのバックアップが大事でしょうね。例えば台湾地震のとき私が世話している台湾のファンちゃん（米山奨学生・曾芳代さん）もいろいろ大変だった。そんな時は留学生でも孤独になったり、気持ちが疲れたりしますね。それをどのように理解して、励ましてあげるか。お金をあげて解決するのは1%の役割じゃないですか」

—カウンセラー制度の問題は?

「義務的な人が多いということですかね。例えば順番が回ってきたからとか、上から頼まれたからという感じで役に就くのが問題です。熱意の問題ですから、改善は難しいですね。もっと米山奨学会が呼びかけて、ロータリアンの理解を得ることが必要だと思います」

—カウンセラーの難しさはありますか?

「燃えている熱意のある人だったら、カウンセラーになるのは楽しいことですね。難しいのは燃えている人をどう探すかということです。カウンセラーになった以上は一生懸命にやらないと、留学生から「ロータリアンや日本人は私たちのことをあまり大切に考えてない」という悪い印象を受けます。例会で話しかけてくれなかったり、日常的な付き合いが上手いはず、ただお金だけ渡す関係になったら別に悪い日本人じゃなくても評価は悪くなります。もし自分の子供が外国のロータリアンから同じ扱いを受け

ればいい気持ちはしませんね」

— カウンセラーを選ぶポイントは何でしょう。「奨学生と友達になれる若いロータリアンをあてることかな。燃えている人であれば年は関係ないですが、できればEメールのやりとりができるロータリアンなら、なおいいかな！」



小林久子さん  
(東京四谷RC)

日本人がもっと心を開くべきです

第2580地区初の女性カウンセラーとして留学生をお世話している小林久子さん。小林さんには、人間的な魅力とパワーを感じました。

— カウンセラーの役割とは？

「まず積極的に留学生に言葉をかけることです。奨学生は「自分は奨学生だ」という気持ちがあるので、意外と自分のことを話せません。常にこちらから日常生活や勉強などいろんなことを聞いて、留学生生活の不安を取り除くことが大事ですね。あと、例会や行事では彼女（米山奨学生・梁 強さん）の名前や米山奨学生であることを徹底的に紹介し、ロータリーでの彼女の居場所づくりに専念しました」

「現場で感じたことですが、男性のカウンセラーは、責任感はあるけれど小さなことを気にせず、「何かあったら言ってください」といった姿勢の方が多くいます。もう少し奨学生の気持ちを理解して、感じていただければな、と思うこともあります。何でも話し合い、信頼し合う関係になることが大事ですね」

— どんな相談がありましたか？

「卓話について相談がありました。彼女の専門分野である医学の話をも30分しても、半分以上はわからない。だから医学の視点から中国料理の話とか、冗談とか盛り込んだらいいんじゃないかと、いろいろ意見を出し合って、ファクスで原稿のやりとりをしました。これは、お互いを

知るきっかけになりましたね。あとは医療制度の相談などが主です。今は改まった相談ではなく、日常の会話の中で彼女が何を考えているのかわかるようになってきました」

— カウンセラーになって得たことは？

「カウンセラーになって奨学生から学んだことは、自分の考えを相手にはっきり伝えることの素晴らしさですね。とにかく<sup>つうめい</sup>聡明で立派な学生さんなので、こちらが学ぶことが多いです」

— カウンセラーを選ぶポイントは何でしょう。

「人の気持ちになれる人。人を信じて、人を自分の方に引き寄せられる人が一番いいかなと思います」

— カウンセラーをされた経験から、日本がだれにとっても夢のもてる国になるために何が必要だと思われますか？

「まず、日本人がもっと心を開かなければなりません。年配の方々はどうしても固定観念をもっている人が多いですね。例えば考え方が違うからとか、国が違うからとか。まず人と会って、気持ちをぶつけ合い、良いところがあればそれを引き出してあげないと、日本社会で思うような活躍はできません」

取材後のコメント：

小林さんは「男性には懐の深さがある。カウンセラーにはその良さを伸ばしてもらいたい」と強調していましたが、日本女性の細かな気遣いと優しさは、留学生の生活を楽しくし、大きく貢献できると私は信じています。

そして、下村さんの現場での活動を見て感動しました。立派なカウンセラーの方々との出会いで、立派な米山奨学生が育ちます。世界で活躍できる人物になることが、私たち元奨学生からの恩返しになります。

ソナム・ツェリン・シェルパ

奨学期間：1995年4月～1997年3月

世話クラブ：伊那RC

大 学：信州大学